

自分のことを知ろう！語ろう！

社会に出たときに、自分のことを相手に伝え、よりよく生きていくために、学部ごとにさまざまな取り組みをしています。今回は、小学部の「自分を知らるため」の取り組みと、中学部での交流学习での情報保障に関しての取り組みを紹介します。

小学部の取り組み

聴力測定や聞き取りの検査を定期的に行っています。高学年になってくると、自分の聞こえに対する意識も出てきます。教員とやりとりをしながら、自分のことを知る経験を積み重ねています。

測定前



生活の中で聞こえにくかった場面や、補聴機器の調整をしている場合は、聞こえの変化を聞き取ります。

測定後



チェックポイント

- 聴力測定の結果を一緒に見ながら、どの音が聞きとりやすいか、聞きとりにくいかわかる。
- 補聴器のプログラム機能を知り、使い分けを考える。
- 聴力測定の結果を見て、自分が聞こえにくい場面を考える。
- 聞こえにくい場面で、自分ができる対応を考える。
- 話が分からなくて、困ったときの対応を考える。

支援を求めるためには、自分の聞こえを知ることが大切です。

また、自分のことを周りに伝えるのは、とても勇気がいることです。教員と話しながら自分ができる対応を一緒に考えています。聴力測定だけでなく、自立活動など全ての学校生活で、自分のことを考える・伝える経験を積み重ねています。

(文責：針本)

中学部の取り組み

中学部では、奈良女子大学附属中等教育学校との交流学习を毎年行っています。そこで、交流の際の事前学習を行いました。自分の聞こえやコミュニケーション方法を改めて考えコミュニケーションの場面を想定した上で、交流学习で起こりうる状況での解決方法や円滑なやり取りの仕方について考えました。その中で生徒から出た意見を紹介します。

○相手の話が分からない…

- ・スマホのUDトークを使ってもらう。
- ・メモに書いてもらう。
- ・身振り手振りで伝えてもらう。
- ・口形をはっきりと、ゆっくり話してもらう。
- ・「もう一度言ってください」とお願いする。
- ・スマホの録音機能を使って、文字化する。

○模擬店で並んでいる途中でトイレに行きたくなったら…

- ・トイレの場所を紙に書いてもらう。
- ・案内してもらう。

○ジュースを注文したい…

- ・補聴器を見せて聞こえにくいことを最初に伝える。



クラスの中では、手話を第一言語として話していますが、生徒の聞こえ方や家庭内でのコミュニケーションの方法はそれぞれ違います。自分に合った困った際の解決方法や円滑なやり取りの仕方を考え、様々な経験から身に付けていくことが、今後社会参加したときの役に立つと考えています。(文責：山中)

補聴機器の効果や学校での支援について

「重たいから補聴機器（補聴器・人工内耳）を装用したくない。」「補聴機器がなくても聞こえているよ。」一見普通にしゃべっている、普通に聞こえているように思える難聴児から聞くことがあるかもしれませんが。本当に学校生活において何も問題がないのでしょうか？軽度難聴（25-40dB）の人が、補聴機器を装用しない時の聞き誤りは、日常会話で25-50%といわれています。数値で見てみると、本人が気付かない内に、情報を聞き漏らしていることが分かります。では、補聴機器を装用したら、全ての情報を得ることができているのでしょうか？補聴機器の効果や、学校での支援や対応について紹介します。



補聴機器を装用することで、ある程度の聞こえを補うことができます。

しかし

- 言葉としては、聞き取れていない…
- にぎやかな場所や大勢の人が同時に話している場所では、うるさい…聞きたいことが聞きづらい…
- 離れた場所からの声は聞きにくい…

補聴機器を装用した時の聞こえの状態は、一人一人違います。

〈支援のポイント〉

- 話し方を配慮する。

ゆっくりとはっきりと話すことを心掛けましょう。言葉のまとまりを意識して、リズム良く話しましょう。

- 聞こえやすいような環境を調整する。

静かになってから話しましょう。正面から話すことや口元を見せることを心がけましょう。

- 視覚的な情報も使う。

板書やプリント、イラストや写真などを併用しましょう。アイコンタクトを取ってから、会話を始めることもポイントです。

支援のポイントを紹介しましたが、一番大切なことは本人がどうしてほしいかを確認することです。最初は、本人が伝えることは難しいかもしれませんが、しかし、自分の困り感に気づき・考え、周りに伝えることは、大切なことです。少しずつ、自分のことを言葉で伝えられる力を身につけてほしいと思います。

（文責：針本）

コラム

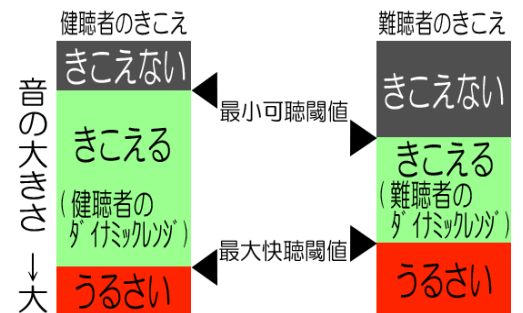
「大きな声」は聞きにくい!? Part. 2

「聞き取れる一番小さな音」から「聞き取れる最も大きな音」までの範囲を「**ダイナミックレンジ**」と言います。

感音性難聴の場合、このダイナミックレンジの幅がすごく狭くなるという特徴があります。難聴があるため、小さい音が聞こえにくいことは納得できますが、実は大きな音にも敏感になり、少し音量が上がっただけで、音が大きく聞こえすぎてうるさく感じたり、強く響いた感じがしたり、割れて聞こえたりする場合があります。

難聴児に関わる教員や周りの大人、クラスの子どもたちが「分かりやすいように」と配慮して、大きな声で話しかけると、不快感を与えてしまうこともあるため注意が必要です。

そのため、今回の記事のように、自分の聞こえ方を知り、適切な支援を求めていくことが必要になりますが、「うるさい」「大きすぎる」と相手に伝えた場合、聞こえる人にとってはそれほど大きな音とは感じていないこともあるため、「どうして??」と分かってもらいにくいことがあるかもしれません。「このくらいの音が聞きやすい」ということを、子どもさん自身が理解して、相手に説明できるように、このような知識を子どもさん自身に伝えていくことも、必要な援助・支援となります。また、補聴器や人工内耳は小さな音は大きくしていますが、大きすぎる音は反対に小さく圧縮してダイナミックレンジの範囲内に収まるように調整しています。快適な聞こえにつながるように、本人の聞こえに合わせて補聴器や人工内耳を調整しています。



<https://www.vivid-ha.co.jp/補聴器の選び方難聴とダイナミックレンジより引用>

